

# ● 九州

## 池田和正

「現代のベートーヴェン」こと佐村河内守のゴーストライター事件は、「芸術」を掲げながらも、商業主義とは切り離せないクラシック音楽界の現実を浮き彫りにした。話題性やビックネームに頼ることなく、芸術の存在意義や、その可能性をどう示すかが問われた1年だったともいえるだろう。

そういう意味では、世界的ピアニストを総監督に迎えながらも、決してビックネーム頼みでないことを示したのが、第16回別府アルゲリッチ音楽祭（4月24日～5月14日）だった。アルゲリッチ抜きで公演されたストラヴィンスキーの音楽劇「兵士の物語」では、清水高師（ヴァイオリン）やサイトウ・キネン・フェスティバル松本の若手メンバーが、表現主義的というべき演奏を聴かせ、「語り」が「悪魔役」を兼ねるアニー・デュトワの演出と相まって、作品のアイロニカルな性格を明瞭に浮かび上がらせた。アルゲリッチとクレームルのデュオも、名手の共演という話題性をこえ、秘められた作曲家の苦悩をあぶり出すような凄絶な演奏だった。

第35回霧島国際音楽祭（7月16日～8月3日）には、音楽監督の堤剛（チェロ）、初参加のエリソ・ヴィルサラーゼ（ピアノ）といったベテランから、成田達輝（ヴァイオリン）、萩原麻未（ピアノ）ら若手まで78人のアーティストが参加、13のマスタークラスと70のコンサートやイベントが催された。音楽祭の中には枝となるアーティストの引退とともに終了、あるいは全く別の内容に様変わりするものがあるが、初回以来マスタークラスを核としているこの音楽祭では、受講生が何年か霧島で学び成長したあと、講師やアーティストとして音楽祭を支える伝統が受け継がれている。

第19回宮崎国際音楽祭（4月29～5月18日）では、名ヴァイオリニストのズーカーマン、ラクリンを招いたオーケストラ、室内楽が催されたが、特筆すべきは広上淳一のタクトによるゼーの歌劇「カルメン」（演奏会形式）。かつてこの音楽祭の芸術監督を務めたシャルル・デュトワの遺風というべき色彩感をオーケストラから引き出し、福井敬（テノール）の堂々たるドン・ホセも圧巻だった。27回目となる北九州国際音楽祭（10月18日～12月6日）では、海外の著名楽団や人気ピアニストの公演を招聘、また雅楽の公演などの新機軸も見られたが、音楽祭にふさわしい独自企画にもっと知恵を絞ってほしいところだ。

九州交響楽団（福岡市）は、依頼公演では佐村河内守「交響曲第1番〈HIROSHIMA〉」の2公演が中止となる被害を受けたが、九州大大学院ホールマネジメントエンジニア養成講座との共催による「九響ジャンプ！ トークセッション&ライブ」（2月17日）でオーケストラの地域における存在意義を積極的に問いかけ、未就学児を対象にした初の主催公演「親と子のためのコンサート」（3月21日）も実施した。また、福岡藩祖を主人公とした大河ドラマ「軍師官兵衛」に合わせてNHKとタイアップ、「官兵衛紀行」のBGM演奏を担当したほか、各種イベントや番組に出演するなどPRに努めた。

定期演奏会では、音楽監督の小泉和裕は3公演に出演、ペー

トーヴェン、R・シュトラウス、ブルックナーというドイツ音楽を特集した。客演指揮者にはイタリアの若手ダニエーレ・ルステイオーニ、韓国のシーヨン・ソンらが登場し、後者は現代韓国の作曲家チン・ウンスクの「ロカナ～光の部屋」を取り上げた。ソリストのウェン・シン・ヤン（チェロ）、ハオチェン・チャン（ピアノ）も含めアジア勢が目立つのは、アジアに近い福岡にある楽団としての立ち位置を明確にしたものだ。

このほか主催公演では、桂冠指揮者秋山和慶によるレスピーギ「ローマ」3部作（3月4日）が好演。指揮者らのトークを交えて作品の魅力に迫る趣向へと一新した「天神でクラシック」シリーズも好評だった。

地元の演奏家・団体では、池田泉指揮、コレギウム・プリエール合唱団・合奏団によるヘンデル「メサイア」（モーツァルト編曲版）（4月13日）、安積道也指揮、西南学院オラトリオ・アカデミーによるバッハ「ヨハネ受難曲」第2稿（11月2、3日）が、通常は演奏されない版を用いる意欲的な試みだった。大分県在住の鍵盤楽器奏者、小林道夫は大分や佐賀でチェンバロやピアノのリサイタルを催し、80歳を迎えても健在ぶりを示した。

宗像ユリックス（福岡県宗像市）を本拠地とする九州唯一のブローの吹奏楽団、九州管楽合奏団は創立10周年を迎えた。ポップスコンサートのほか、定期演奏会（5月11日）では、ヨハン・デ・メイ「交響曲第1番〈指輪物語〉」を作曲家自身のタクトで公演するなど、この分野での芸術的な挑戦を重ねている。響ホール室内合奏団（北九州市）、OMURA室内合奏団（長崎県大村市）もそれぞれ地元に着目した活動を展開した。

福岡市の公共ホール、アクロス福岡（福岡市）は開館20年目。ウィーン・フィル、マリンスキー管、イスラエル・フィルなど海外名門オーケストラの招請だけでなく、團伊玖磨のカウンター「筑紫讃歌」（6月1日）や、新・福岡古楽音楽祭2014（10月11～13日）、チョン・ミョンフン・プロジェクトなどの独自企画、さらにサントリーホールなど3館で古代祝祭劇「太陽の記憶一卑弥呼」（11月26日）を共同制作するなど、九州の基幹ホールとして存在感を発揮した。

このうち新・福岡古楽音楽祭2014は、昨年までボランティアで運営されてきた福岡古楽音楽祭を官民一体の音楽祭として刷新した。イタリアの古楽アンサンブル、ラ・ヴェネツィアーナによるモンテヴェルディのオペラ「ポッペアの戴冠」（演奏会形式）をはじめ、室内楽コンサート、講習会や愛好家による演奏会からなる。メーンの公演は毎年外部からの招請となるが、室内楽コンサートには、旧音楽祭からの常連である前田りり子（フルート）、鈴木美登里（ソプラノ）らが出演、彼女らが講習会の講師も務めることで、旧音楽祭からの連続性も保たれている。

このほかの公共ホールでは、アルカスSASEBO（長崎県佐世保市）、iichiko総合文化センター（大分市）、メディキット県民文化センター（宮崎市）などが、それぞれランチタイムコンサートやジュニアオーケストラの育成などの独自企画で存在感を示した。